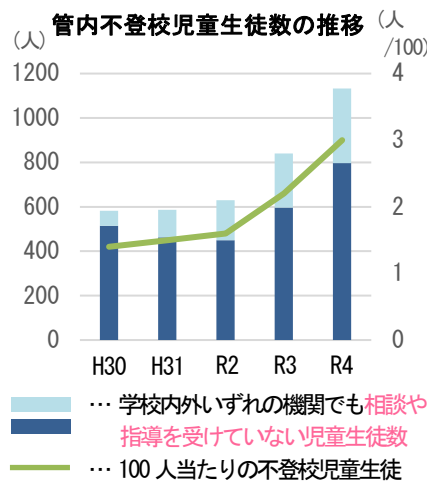




一人一人の子供を主語にする学校教育

副所長（兼）指導課長 太田 千春

小学校 685 人、中学校 1388 人。本県の小中学校で 2022 年度に不登校だった児童生徒数です。全国・県と同様に、村山管内においても不登校児童生徒数は過去最高となっており、特に、小6から中1、中1から中2での増加率が高い状況が見られました。学校の先生方がこまめに家庭訪問を行ったり、別室で学習支援を行ったりと、様々な形でご対応いただいているものの、無気力・不安の他、学業や進路等への不安、人間関係の悩みや不安など、不登校の要因も多様化してきており、増加に歯止めがかかっておりません。また、小学校で約 38.6%、中学校では約 24.6%の児童・生徒が、学校内外いずれの機関でも相談等を行っていない状況にあり、学校での取組を進めると同時に、適応指導教室やフリースクール等の民間施設、ICTを活用した学習支援等、多様な教育の機会を確保し、そうした支援や相談体制にたどり着くための情報をわかりやすく明示していく必要も感じています。



昨年5月、「ゆめパのじかん」という映画を観てきました。舞台は、神奈川県川崎市にある子どもたちの居場所「川崎市子ども夢パーク」の一角にある「フリースペースえん」。学校に行っていない子供たちの居場所を公設民営で運営している施設における、子供たちのかけがえのない「じかん」を3年にわたり見つめたドキュメンタリー作品です。作中、子供自身が学校に行かない心根を「(学校の) ノートに写すだけの勉強が嫌いなだけ」「(不登校の理由を問われ) わかんない。答えられる人なんているのかな」と語る場面があり、公教育に携わる者の一人として、学校に誰もが安心して自分らしく過ごせる居場所がつくれてきたのか、様々なことを考えさせられました。遡れば、令和5年3月31日付けで、「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」(COCOLOプラン)が通知され、不登校対策の一層の充実が求められました。不登校児童生徒への支援は、「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要がありますが、学校教育には、一人一人の能力を伸ばしつつ、社会において自立的に生きる基礎を養うとともに、国家・社会の形成者として必要とされる資質・能力を養う役割があります。本通知を村山管内の現状に照らして読み、多様な学びの場が確保され、学びたいと思った時に学べる環境を整えることと併せて、学校を「誰もが安心して学べる」場所にしたいという思いを強くしました。

前述したCOCOLOプランの取組の一つに、学校で過ごす時間の中で最も長い「授業」を改善することが示されています。今、学校には様々な特性をもつ子供がおり、指導の個別化と学習の個性化の両面から「個別最適な学び」を進めるとともに、多様な他者の考えに触れるよさや楽しさなどの実感の伴った「協働的な学び」を一体的に充実させていくことが必要です。日々の授業を通して、それぞれのよさや可能性を最大限に引き出し、自己実現を支えていこうとする姿勢は、学校に「安全・安心な風土」を醸し、学校生活に生きづらさを感じている子供にとっても、自分の居場所を「学校」に見出すことにつながるのではないのでしょうか。改めて、自分自身のもつ教育観を「そろえる」教育から「伸ばす」教育へと転換を図り、一人一人の子供を主語にする学校教育を展開する覚悟が必要であることを痛感しています。誰もが安心して学べる魅力ある学校づくりをされている実践に多くを学ばせていただきつつ、管内の全ての学校による目指す学校像、目指す子供像の実現に向けた取組を少しでも後押しできるよう全力を尽くす所存です。

令和5年度 育ちと学びをつなぐ 幼保小中接続推進のための研修会 (兼) 第3回学習指導力向上研修会

Zoom 開催

令和6年
1月25日(木)

本研修会には、村山管内の幼児教育関係者 41 名、小中学校関係者 68 名、特別支援学校関係者 2 名、行政関係者 9 名、合わせて 120 名の方に御参加をいただき、岡山大学教育推進機構 准教授 中山芳一氏より非認知能力である「学びに向かう力、人間性等」に関わる御講演をいただきました。

「学びに向かう力、人間性等」は、幼稚園教育要領等や小・中学校の学習指導要領に「育成を目指す資質・能力の三つの柱」の1つとして挙げられ、どの校種においても育成が求められています。

幼児教育では、育成を目指す資質・能力が育まれている具体的な姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)として示しています。「思考力の芽生え」や「協同性」などの幼児期で生まれた10の姿は、小・中学校で目指す「学びに向かう力、人間性等」の「粘り強さ」「自己調整」「感性、思いやり等」の育成の基盤になるものです。

幼保小中における子供の学びを支えるために、非認知能力である「学びに向かう力、人間性等」が育まれている具体的な姿に基づいた発達や学びの連続性を、系統的に捉え、保育・教育の質の向上を目指していきたいものです。

演題 「学びに向かう力、人間性等」を育成する保育・教育について考える

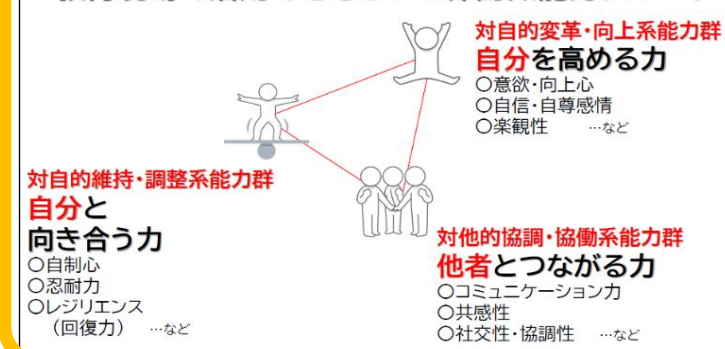
学校生活の8割を占める授業の中でこそ、認知能力と非認知能力を一体的に育成していくことが重要です。そのためには、学校や学級でどのような非認知能力を児童・生徒に育成したいのかを明らかにした上で、計画を立てる際、単元や本時の目標の達成をねらうとともに、「ここでは特にコミュニケーション力」というように、育みたい非認知能力を具体的に絞ることが必要です。

また、子供の非認知能力を伸ばすためには、教師が、「空間・教具・活動等」の環境に意図的に働きかけたり、子供の行動や発言などを価値づけたりすることで、「意識づけ」し、子供自身が高まろうとするきっかけにすることが大切です。

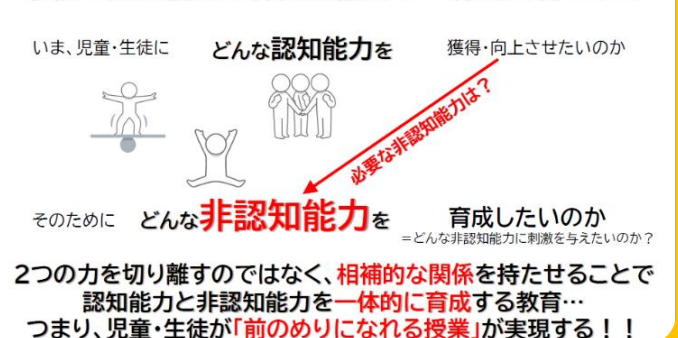


岡山大学
教育推進機構
准教授 中山 芳一氏

教育現場で活用できる3つの非認知能力グループ



学校で認知能力と非認知能力を一体的に育てる！



感想より

講義を受けて、幼稚園教育から小学校、中学校へとつなぎ、積み重ねていくことが大切だということがわかりました。発達段階に合わせて、教師の関わり方にどういった工夫が必要なのかを学んでいくことが大事なのだと思います。(幼稚園 園長)

教育現場で活用できる3つの非認知能力を意識し、普段の授業から取り入れていきたい。非認知能力のめあてを、教科のめあての次に提示することは考えたことはなかったので、児童の実態に合わせて取り入れていきたい。(小学校教諭)

生徒の感情の動きを踏まえた授業を立案したり、評価したりしたいと思いました。認知能力と非認知能力をともに育む授業づくりの在り方をさらに学んでいきたいです。(中学校教諭)

ネットワーク(NW)型研修会 ～研修のまとめより～

今年度は、3つの部会を開設し、共通研修テーマに基づいて9名の先生方と一緒に研修を行いました。日々の授業づくりについて研修者同士で悩みを共有し、授業構想について語り合ったり、教育研究会や校内授業研究会に参加したりして、主体的に学びを深めることができました。また、実践を通して感じた課題を、同じ部会の仲間と共有し、次に生かそうとする姿もありました。先生方にとっては、地域を超えてネットワークを広げることができたことも大きな成果だったようです。本研修を通して学んだことを、ぜひ自校の研修にもつなげていただきたいと思います。各部会の研修のまとめの様子を紹介します。

～ 共通研修テーマ ～

『個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実』という観点からの授業づくりについて

A教科教育研究コース(国語・算数部会)

国語の「おもちゃの作り方をせつめいしよう」では、単元で育成を目指す資質・能力やゴールの姿を子供と共有し、一人一人の子供が学習のねらいに沿って、自分に合った方法を選択するなど単元計画を工夫した。算数の「九九をつくろう」では、自分の考えを確かめたり新しい考え方に気付いたりして、子供自身が必要だと思う情報を必要なタイミングで収集できるように学習環境を設定した。研修者がそれぞれの実践を語り合うことを通して、「単元で育成を目指す資質・能力を子供と共有する」、「子供が学習内容や方法等を選択できる場を設定する」など、子供が主体的に学習を調整できるよう、学びの過程を想定し、単元を構想することが必要であることを実感することができた。



〈第3回研修会より〉

A教科教育研究コース(社会・総合部会)



〈第4回研修会より〉

社会の「世界に歩み出した日本」では、単元の導入で社会的な事象を時間的・空間的な広がりに着目してとらえることができるよう、単元を通して解決を目指す課題を子供と共に設定した。本時の終末では、課題について一人一人が振り返ることで、子供自身が次時の課題を焦点化し、見直しをもつなど、学習を調整することができた。総合的な学習の時間では、生活の中から解決すべき課題を見つけ、自分の事として取り組む態度を育むために、一人一人の子供の思いを大切に課題をつくった。課題解決に向けて、探究の過程において子供が身に付ける資質・能力を想定し、適切に評価しながら支援していくことが大切であることを学んだ。

B 特別支援教育研究コース

特別支援学級の国語では、子供が何につまずいて何に困っているのかを丁寧に見取ることを重視して研修を行った。実践を通して、子供の視点で「どのように学ぶか」を想像し、支援していくことの大切さを実感した。通常学級1年生の国語では、子供自身が「できた」を実感できる授業づくりについて、研修者同士で検討した。実践を通して、課題解決に向けて、子供が自ら周りの人や教材とつながりたくなるような環境をつくるのが大切だと気付いた。研修を通して、個に応じた指導と共に、子供同士が学び合うことにより、思考が深まることを実感することができた。また、一人一人の子供にとって、自分が大切にされていると思えるような授業づくりについて、また、そのための教師の役割について考える機会になった。



〈第5回研修会より〉

「いっしょに Linkる?」～「やってみたい」をカタチに～

この事業は、地域活動に興味関心の高い中高生が、青年ファシリテーターの助言の下、講義や体験、企画・運営の実践を通して、地域活動の理解を深め、地域づくりの次世代リーダーとしての資質を高めることをねらいとしています。今年度は、村山市のにぎわい創造活性化施設「Link MURAYAMA」を活動拠点として、参画者5名、青年ファシリテーター4名が、以下のような流れで活動しました。

参画者作成デザイン



アイデア出し

企画書の作成

他団体・企業へ
企画のプレゼン

企画の具体化

企画の実践へ…

「Link MURAYAMA」の魅力伝えたいという思いと地域の子供と交流したいという2つの思いを、「キーワードラリー」というカタチで企画しました。地域団体や企業へ企画を説明し、協力・支援を得るなど、企画実現に向けて様々な挑戦をしました。そして、企画当日は、多くの来場者に楽しんでもらいました。



【リーダーとしての資質(想像力・創造力、コミュニケーション力、行動力)についての参画者の実感】

- ・今まで現実的にできるかできないかでアイデアを出していたけれど、Linkるメンバーと自由にやりたいことを考えて実行したことで自信がついた。
- ・企画を立てるまでの過程や実行するまでにたくさんの人とつながることができた。
- ・「できなさそう」だからやめるのではなく「どうにかしてやろう!」ができたことが良かった。



郷土の魅力発見・体験プログラム普及事業

山形市放課後子ども教室ベニっこアフタースクール「秋の木の実でクラフトづくり」

県教育委員会では、今年度より「郷土の魅力発見・体験プログラム普及事業」を展開しています。

事業のねらい

地域における社会教育の拠点＝公民館(コミセン)を舞台に、地域で学び、生活している中学生がキーパーソンとなり、郷土のよさを体感できるプログラムを企画・実践し、小学生向けに発信することで「郷土愛」を育む学びの循環をつくる。

今年度は山形市教育委員会が主催している放課後子ども教室「ベニっこアフタースクール」の一プログラムとして実施しました。

参画者(市内中高生等)が企画会議を重ねながら「**地元の自然に親しみ、小学1～6年生まで男女が一緒に楽しめる内容にしたい**」という思いを具体化するため、様々な配慮や工夫をしながら準備を進めました。

10月28日のプログラム当日は、大勢の地域住民と交流しながら、思い思いに作品づくりに没頭する参加者、充実感に溢れた参画者の姿がありました。



参加者の声

「私も中学生になったらたくさんほめたりして、そのときの小学生の思い出に残るようにしたいと思いました。」「作っている間にほめてくれ、心があたたかくなりました。」

参画者の声

「とてもやりがいを感じた。」
「多くの人の子供のために温かく接することができることを実感した。」

今後も「郷土愛」を育む学びの循環づくりを目指します。